



尾形明子

自らを欺かず

泡鳴と清子の愛

尾形明子

自らを欺かず

泡鳴と清子の愛



尾形明子（おがた・あきこ）
 東京に生まれる。早稲田大学
 第一文学部卒業。同大学院博
 士課程修了。現在、東京女学
 館短期大学教授。近代日本文
 学、特に自然主義文学と女性
 文学——「女人芸術」「輝ク」
 の発掘・研究を専門としてい
 る。主な著書に「女人芸術の
 世界——長谷川時雨とその周
 辺」「『輝ク』の時代——長谷
 川時雨とその周辺」「作品の
 中の女たち——明治・大正文
 学を読む」（以上ドメス出版）
 「田山花袋というカオス」（沖
 積社）などがある。

自らを欺かず

——泡鳴と清子の愛

二〇〇一年四月二十日 第一刷発行

著者 尾形明子

発行者 菊池明郎

印刷 明和印刷

製本 積信堂

発行所 筑摩書房

東京都台東区蔵前二一五—三

千一—八七五五 振替〇〇—一六〇八四二三

ご注文・お問い合わせ、乱丁・落丁本の交換は左記宛へ。

〒三三—八五七 大宮市櫛引町二〇四 筑摩書房サービスセンター

TEL 〇四六五—〇〇三

自らを欺かず・もくじ

序章	7
第一章 「苦しき恋」と政治の季節	16
第二章 霊が勝つか、肉が勝つか	34
第三章 蜜蜂の家	57
第四章 「母の胎内において男と女は平等であつた」	73
第五章 愛の闘争・修羅の日々	108
第六章 泡鳴と貞操問題	133

第七章 枯草の日の記憶

161

第八章 もうひとつの愛——清子と達之助

182

第九章 「先づ子弟をして婦人を尊敬せしめよ」

207

第十章 解放と飛翔の時

233

第十一章 「別れたる夫泡鳴氏の死の驚愕を前におきて」

262

第十二章 三つの墓の秘密——泡鳴・清子・達之助

284

終章

297

自らを欺かず——泡鳴と清子の愛

装幀・多田 進

カバー／橋口五葉〈鉄砲百合〉

（鹿児島市立美術館所蔵）

表紙・扉／橋口五葉〈歌集「早春」〉

（鹿児島歴史資料センター黎明館所蔵）

序 章

時雨が通り過ぎる。

わずかな冬の陽が賀茂川に鈍い光の輪を作り、水鳥が群れている。川の向う側は車の往来が絶えないのに、羽音のほかは音はなく、京都府立病院裏の広い河川敷に佇みながら、遠藤清子を追い求めている私の旅が、終わりに近付いてきたことを思う。

二枚の写真が浮かぶ。

一枚は大正三年の正月、巢鴨宮仲町の自宅二階で大きな瀬戸火鉢を囲んで、平塚らいてう、荒木郁子、小林哥津ら五人の青鞥社の人びとと一緒に写真。一人だけ大丸髷に結った少し平たい顔はあまり表情もなく、大きくカーブした眉の下の丸い目はどこか遠くを見ている。当時清子は三十三歳、自然主義作家岩野泡鳴の妻であり、翌月の出産を控えた清子を気遣って、泡鳴が青鞥の新年会に自宅を提供したのだろう。「青鞥バッシング」、「新しい女バッシング」が吹きすさぶ中で、清子は泡鳴の理解に支えられてその代表格として自他共に許していた。が、写真の追いつめられた小動物のような頼りなげな表情と、「人類として男性と女性に平等である」と歯切れよく言い切る清子とはうまく重なら

ない。

もう一枚は、おそらく大正八年、三十八歳の時。『新真婦人』復刻のパンフレットで目にした写真である。ややエキセントリックで鋭角な顔は別人のように美しい。日向きむ子、伊藤あさ子らとともに、泡鳴との離別後共に暮した洋画家遠藤達之助と、泡鳴との間に生まれた民雄が並んでいる。目はカメラを見詰め、小柄な体いっぱい強い意志がみなぎる。明確な輪郭をもった女性がいる。

わずか四、五年の違いなのに、あまりに異なる清子の顔であり、清子自身の変容だった。二枚の写真の向うに、不意にワシントンに住む遠藤愛子の顔が重なる。

大正九年十二月十八日、清子がこの京都府立病院で三十九歳の生を閉じた時、愛子は生後七か月の赤ちゃんだった。京都には達之助の実家があり、おそらくは愛子の籍についての話し合いのために京都を訪ね、持病の胆石の発作に襲われたのだろう。手術から醒めることなく、清子はわずか二日間の入院で他界する。枕辺には達之助と二人の子供、清子が晩年もっとも信頼していた弁護士の川口庄蔵、達之助の弟で薬科大学に通う健吉がいた。泣きじゃくる達之助に代って東山西大谷の火葬その他すべてを取りしきったのは健吉だった。

突然に母親を失った愛子の泣き声が、七歳の民雄の泣き声とひとつになって、私の中で響いたのは、八年前、初めてこの場所を訪れた、やはり冬の日だった。今、建設中の病棟は、かつての療病院のままだっていて、木のノブのついたコンクリートの病室からは時々咳込む声がした。

冬枯れの賀茂川の景色はどこも茶色く、コートの襟をしっかりと立てても背筋が震える寒さの中で、生死のほどもわからない愛子を私はひたすらに思っていた。十年余りの年月に私が集めた資料の山は私に『青鞥』の人・遠藤清子を語る。女性の政治参加の一切を禁じた治安警察法第五条改正請願運動

は、後の婦人参政権につながる日本で最初の女性による政治運動なのだが、その中心として、あるいは『青鞥』における徹底した男女平等の主張者として、また岩野泡鳴との同棲から離別までを日記体で綴った『愛の争闘』の著者として、清子への関心は私の中で資料と共に深まっていた。

が、にもかかわらず清子の声は私には聞こえず、大丸髻の清子の像は手で触れたらとたんに壊れてしまいそうなあやうさのまま私の中で静止していた。そうした中で、愛子は私と清子とを結ぶただひとつの確かな手掛かりに違いなかった。愛子の存在だけが、あるいは愛子の父親である遠藤達之助だけが、清子の像に生命を通してくれるはずだった。動くことない清子の像に私は少し苛立っていたのだろう。生きていてほしい。いつの日かあなたに清子の愛と生とを語りたいと私は愛子に向かって呟いていた。だから、それからの八年間は、愛子と達之助を探しての旅だったといってもいい。泡鳴との遺児民雄は、関東大震災の折、行方不明になっていた。

愛子と達之助について資料はほとんどなかった。平塚らいてうも日向きむ子も清子についてはかなり詳しく語っているのに、二人については触れようとしない。消息を知らないのではなく、清子のために二人を守っている感じがした。すでに『青鞥』の人たちは遠く、確かめる術もなかった。

そうした折、『京都新聞』に清子について二回にわけて書く機会があった。編集委員の中村勝氏が二人の消息を呼びかけてくれた。電話があったのはその直後だった。達之助がごく近年に亡くなったこと、生涯画家であったこと、さらにそれぞれの家にはそれぞれの事情があるのだから深追いしないでほしいという内容だったと知らされた。身内らしいその電話は私に遠藤達之助の縁者が今も京都にいること、おそらくは愛子も生きていることを確信させた。私を興奮させた電話だったが、それ以上に進みようもなく、清子はいいかかわらずそのままに私の中で静止していた。

そして、今、遠藤愛子はワシントンにいる。

愛子の存在を私に教えてくれたのは達之助の三男で彫刻家の小畠廣志氏だった。偶然が重なったというより、ようやくにその時が来たということなのだろう。

不二出版の山本有紀乃さんから放送作家の林千枝子さんが達之助をよく知っていると教えられたのは一年前だった。林さんは、代議士日向輝武と結婚し長谷川時雨の『美人伝』にも取り上げられた日向きむ子と、きむ子が輝武の没後に再婚した詩人林柳波の長女である。

吉祥寺の閑静なお宅には、千枝子さんが長女を出産した折に達之助が贈ってくれたという桃の油絵が飾られていた。底に光を沈めて淡い色で桃が浮き上がっていた。ようやくに出会えた絵はなつかしくあたたかかった。清子の死後一年も経たずに達之助は川端龍子の弟子の小畠鼎子と結婚、一人娘のために小畠家に入り小畠達（辰）之助となる。林家と同じ吉祥寺に住み、家族のように出入りしていたという。

「母ととても仲良しで、きつと母には清子さんと同じ臭いがあつたのでしよう。私たちも達之助小父さんと呼んで親しんでいました。母は晩年踊りの師匠をしていましたが、達之助小父さんが描いてくれた黒縹子地にバラを描いた帯や白帆布地に葉牡丹の帯をよく締めていました。父の詩集の装幀をしたり、マージャンをしたり、何日間も居続けるので奥さんからよく電話がかかってきたものでした。

鼎子さんはとても美しい人で日本画家として活躍して近代美術館にも作品が入っています。お子さんは四人。お一人は戦争で亡くなれましたが、彫刻家の小畠廣志さんをご両親のあとを継いでいられます。自由気儘な人でしたが、清子さんによく尽してくれたと母はとても感謝していました」

林さんの紹介で小金井に住む小島廣志氏を訪ねたのはそれから間もなくだった。小高い丘の上にある小島家の庭の向うにはまだ武蔵野の面影を残した林が広がる。

「京都新聞に電話したのは叔父の健吉でしょう。達之助のすぐ下の弟で薬剤師でした。もう亡くなりましたが、清子と娘の愛子のことを私たちに教えてくれたのがこの叔父でしたから。父の葬儀の目でした。叔父は清子の最後を看取ったそうですが、もうすっかり手遅れだったようです。清子が社会主義者だと報じられていたので死後本家に新聞記者が押しつけてきたり、そうしたことが全部叔父が押しつけられたと言っていました。ずい分迷惑をかけられたのでしょう」

美術に詳しい友人から小島廣志氏が現代日本を代表する彫刻家であり、特に木彫が優れていること、東海大学の教授を辞して、埼玉県入間市にKOBATAKE彫刻工房を持ち若手彫刻家を育てていることを教えられた。彼が持っていた小島氏の木像「女の首」が私の心をとらえていた。昭和十年生まれの長身でダンディな小島氏に私の中の達之助を重ねてみる。でも小島氏は母親に似ているらしい。

小島家には、鼎子が達之助との結婚を決意した際に探偵事務所に依頼した「入念調査書」が残されていて、廣志氏の話と合わせて遠藤達之助の生涯が広がる。

明治二十五年五月十一日、清子より十年あとに達之助は京都一条烏丸に遠藤新兵衛、シカの五男として生まれる。遠藤家は代々、御所、西本願寺に扇を納める家で、父新兵衛は四代目を名乗っていた。家は間もなく油小路に移るが、京都一中（現・洛北高校）在学中から達之助は絵に興味を持ち鹿子木孟郎の門下となる。卒業後当時日本郵船にも贈答用の扇を納めていた父に連れられて上京し、赤坂溜池にあった黒田清輝の私塾葵橋研究所の研究生となる。二十歳だった。

清子と出会うのは大正五年春頃。六年二月、清子と泡鳴の離婚成立時にはすでに共に暮していたと

思われる。九年五月末、愛子の出産、その年の十二月清子の死後、愛子を弁護士川口庄蔵の養女とし、民雄を清子の古い友人であり、泡鳴最後の愛人ともいわれた荒木郁子に託す。清子の遺言だった。ひとりになった達之助は大正十年五月に京都の家から分家し、清子と住んだ巢鴨の家の単独戸主となっている。

八王子に五面のテニスコートを持つ銀行家の一人娘小畠鼎子とテニスを通して親しくなったのはこの頃だろうか。府立第一高等女学校を卒業後川端龍子の弟子となり画家を志す美しい鼎子にすぐに夢中になったらしい。「入念調査書」の日付は大正十年八月となっている。小畠家の財産に支えられ三男一女に恵まれる。一時「東京日日新聞」の記者となるが、大正十五年に長男が生まれると間もなくインドに渡りテリーの美術学校に入る。帰国後改造社の『世界大衆文学全集』の口絵を描いたりするが、昭和五年三月八日の「中外商業新聞」に個展の記事が載る。三月八日から十二日まで銀座松屋で花と果物をテーマに油絵の個展を開いたこと、こうした売りやすい小品ばかりではなく大作を期待すると記事は結ばれていた。その後玉川学園、武蔵野学園の美術教師をし、『児童百科大辞典』（玉川学園刊）の美術教育篇を書いている。

戦後は長男の戦死もあり、一切仕事につかず自分の絵を描き続けたという。中村草田男と親しく、俳誌『萬緑』の表紙絵を毎号描き続け、昭和五十三年三月十六日、八十五歳の生涯を閉じた。死後、個展が文藝春秋画廊で開かれた。

「どこにも属さず生涯無冠の帝王だと威張っていました。モボの典型のような人で、ボヘミアンで、すべてにフアジイに生きた人でした。私にとっては同業者としてライバルでしたし、息子のアカデミズムに反発していたようですが、いい絵を描きました。バラの花が好きで気に入ったバラの花を見る

と花泥棒に行くんですよ。手拭いで頬かぶりして。ずい分描いたはずですが、みんな女の人にあげてしまう。とにかくよくもてた人で、彼は美しい人も好きだし、そうでない人には自分が力になってあげなくてはと思う。深情けで死ぬまで女の人の影がありました。母は夢二の描くような女性で、いつでも女中にかしずかれています。戦後は母の描く絵を売って生活していました」

廣志氏はワシントンに住む愛子と遺産相続の件で一度会っている。非嫡子として遠藤家の戸籍に記されていたという。

「結婚する時に父親から簡単に話してもらったということでした。私とよく似ているのでびっくりしました。ワシントンに永住するつもりのです。名前も変わっていますし。父はいい加減な男でしたが、一年に一度、きちんと三つ揃いを着て、銀座の川口さんの事務所を訪ねていました。愛子の消息は全部知っていたのでしょう。『青鞥』の人たち、平塚さんや林さんとも生涯でいねいにお付き合いをしたようです」

見せていただいた愛子の写真は、晩年の清子にもどこか似ていた。

廣志氏から教えられたワシントンの住所に宛てて手紙を書く。返事が着き次第会いに行くつもりだった。二週間後に返事が届いた。

「突然のお便り拝受いたしました。今人生のたそがれ時、かぐわしくない生の秘密に触られたくない気持ちをおわかりになって戴けますでしょうか。私の結婚の時にあたって必要になった戸籍の書面を極く簡単に川口の父は説明して呉れました。その私にとって父母とは育てあげてくれました川口庄蔵及びくにの二人のみであるのです。川口の父のやさしい思いやりに反いて生みの親のことは追及したくも、またされたくもないのです。」

貴方様の御研究には貢献できません。残念ですけれどもごめんなさい。このことには触られたくないのです。この事はこれで打ち切ってお忘れ下さるよう伏してお願ひ申しあげます。」「どうか遠藤愛子の存在を御放念下さいますよう重ねてお願い致します。御研究のご成功をお祈りいたします。通信もこれで打ちきらせて戴きます。」

失望とほんの少しの腹立たしさと悲しみとでいっぱいになり文字が涙でにじむ。が、落着くに付れて、私の興奮した手紙が静かにワシントンで暮らす七十六歳の女性の心をどんなに乱してしまったことかと思った。「ごめんなさい」という文字にその人の哀しみと優しさがこめられていた。

手元に一冊『愛の争闘』がある。武蔵野女子大学教授の竹田日出夫氏が古書店で見付けたからと私に貸して下さってから、もう数年間私の書棚にある。『愛の争闘』は私自身の解説で不二出版からすでに復刻されているのだが、このオリジナルには見開きに清子の手で「角園善五郎氏に」とあり、「此書は、私の二十八歳から足かけ六年間に歩いた足跡の記録です。そこには人生に対する私の無経験から来た多くの失敗や苦悩があります。勿論それは私の世間見ずから来た当然の帰結であつたにしても、私にとつては尊い経験でした。併し又苦しい悲しい経験でした。当時の事を述懐する度に私は涙なしにゐられません。あなたが今秋、私の此書を街の店から拾ひ上げて来て下さった時、私は他人の手に渡した子供が連れ帰られたやうな懐かしく又悲しい思ひを味ひました。」

と書かれている。日付は「大正九年十月五日夜」。死ぬ二か月前の文字である。

達筆だが固い清子の文字は、清子がこの世に確かに生きていたことを私に告げるたつたひとつのものだった。愛子の手紙を、もう色あせた清子のペン字に重ねようとして、二人の文字があまりに似ていることに胸を突かれた。七十五年の歳月を経て、清子の思いが私を通して愛子をたぐり寄せたとし